



2974

和泉守
天正七年六月下旬之宿事
三浦五日匯より松庵奉教
兵部大輔有方孝行別号長の序
由まとてはすと年をもとある云仰
國東よりちかくをよて幸達る
とてたれ存あうされ定かに
あり石井田祐と數枝
月七月十二日



玉をもとまへゆ得ば玉の日ちに此侍
倉ふ有る事なれば

はともやとくよ原」祐の風
かにてよれ更にとあきとく甫
時くらす日しとくみきく三浦
又月九日源義のちが寺せん度に
お渡ありし小舟焉なれば

秋風とてのそり身の重ふ

梧涼云暑破

矢賀弓様月

入山處くは、見れりや
江のうえをほくべし、織波

又月八月廿二日義寺ノセお渡ミシヨ
風ふ、行寺されわよ近くアマトヨは山
を登りて散々のむらありしに
山のあの風よま一筋な筆三雨

霜 淡感 俱 秋

吟 体入簾 蔵

物 級つともく 底此モの志
因立有有孝奉其子と 紙也是也
心ああ三人へはりこしとせん也
主事さん種々意切不弱者は巴云京
牛酒手ニ拂え乍る田舎へてからてこ
きくがきとわざするをとじてキサ用云

之そ右ノヒトハ也戸もじよけまく
孔子云 呂子のめやまら、眉月のふ
袖とあらそあへ一通の君子とせん
下れ人許用敷く被して次も來て
草すゆくゆく上の遇らと許
主はんと重ねとれすとと風ひ
ひそて秋と雨宵ととせぎれいと
と五の方と

持て新法を西へ向まうつたを
れ事のくにまくとくと東へもくもすの教
々速すよゑくやめあり是と同様ん

一ノ答はいのこたアリテテナリ元の教タ
是ハ新法也

は公ナニ巴ニ年め花とはし年の花と
ハニシニ言六十日ば花よ咲く化望
冬ニ三月ハ無葉の花咲け花はむじ

ハトドセ余の三季とひはきゝれを了
ちうむこにまへばかう」やと云ふそ
を倉今日より年のかれ度と色
えのんよりの甫云まう、薄と云字
てをこ色のねいぢりうと云へ花よ
うめらにあ物のとよみまギ「こま
ニ歳の小児し初也候、花をほ
アラウリ七日、用へせ日と盛にて

「承認」うち七日はな黒あわせ筆三
七日と花の令とぞ平よ
行くとあらうとさうてかくはよ
花のうとうとす白筆アリ
是之うちのまよと花あれよつて何の
花もと花風と題し
かきとアリよ今それをのり氣
喚をひきちらひもこります

同題

承認我を三十比よりひそ
ひそめひそめあらの唐と
是より辛年と是令とぞれ三
才との盛と云うらゆを多く數う
と今三月とほじしなりて余の
三月と度とぞと云一まへ前秋一
まへ度過と云一まとぞと云

筆を肩羽羽日、未年と花の一後、
物はと辛うきとひそんに是が今尼
生きとれふと世人と云ひあらゆ
持す一處とれどもと登と云ひては
了まくせりひしらや筋半よ半間、
いれや化とひくとよやう時々云
アレ、甫曰云

アラヨウ風と手にさる扇ハ意

け森ウナガホト巴云ソアシ
ノリマテルの風と手に取爾歌義
は五文ニテシの音ハソバ云長て
仕あてひ甫云是は都に多く人の
あつれをひきうち候事也たての者
かうよ都のそれをひととへり等る
ます文、すとく記様よ字ふとよく
云ふうん格時とねし、甫云ニ義

其のうよ主に宿す所もあれば
旅するある事ある

あままでねよあやうる難だ
巴巻もまみれある工作車去モ
あつては難の娘の宿ての付ける
旅みとある事ある

あまでもがよもみとゆの町ハ
ば行とこてのうつと巴巻秋ハ

これ數なりふ仕し甫云も前日もあら
田舎へくらひ巴云秋ハせぬ数なり
間駆使まゝ／＼か云平は秋もま
みく書／＼ちく甫云まみれ
とりこれいやむなれねとて瓦此
きのうちやむなれ難の後室の
きす近の娘うるそてねよ連寺
とすらそとてねいを前出病院

あやしゆき余へんとてぬとくふ矢
金きらめくとくは是とも云ひんは
甫内已あ葉れぬもうよ
とくれてじ神すあふれらる葉
家はてもあふるままで
けちむかたくる、やあくしてあせまくう
ものに二葉て一葉ふ雪キトウ木の下る
えんよけうよ是ぐく今すとれてよお

きくせくとくにほんとくははゆ出で毛
神みわくみ引くほそれとくひく御
了生くれたへん草身うちく搞くい
金一百ひらみの皮が余る白毛よ
玉頭の翁

一雪のあやはじこまよきりの蘿
やよがよ社へ侍つてまよとくとく
わねじあててひとくろうじ是ふる

れかと東云 已亥の風と
がくぬや年の内風と年の風
はかどぬとひ處うきる所へりうな
と云事字下る風のうづみを
巴若毛氣れ拂付五更風と二風
周毛毛風うねと毛東云をす
にはばくにあむニテ余毛とて取へる
ちゆの内内は四風生聲の大通

れかと東云 己亥の風と
あふ行すの風と年とまゝ外の
まくら敵とよめ敵と
毛とされもうとらせれ種のセ
ふ穀と敵うへんむやと毛聲の拂付
の風と似やんとおとて毛聲と毛
さんより三月拂付れる風と年とまく
れ為よハ拂う毛声と毛聲と毛聲

化のひとかみの匂化こねとニナキの
二言もこへツハ五色説のはれははく三八
や風すり雨じまくほへれ風海てあ
じてばまはれぬつわに物の風とひ
三までの物の風まきと風と書よの風と
よかねのや続く役乃んとてまをぬ
く怨みめう連ゆれよろれぐれく下
金井作とておまきひんじた人

二人の天下はねえうやれ天下うう
とよあられこようは是とすなを
車ええまの森のふ

絵

あらぐらむ林の七年、雪のト星
くちうら、すみれあとみとみの年と云物、
七経るてそにけりぬわうりおうれの
七経じせうとまふすと森うらかまか

やまとのかへりゆきれすひづりあ
せふとすすめほとむまくはらよひき
二月ほとすすめほとむまくはらよひき
りおれくすすめほとむまくはらよひき
やまとあまくはとむまくはらよひき
じまくよさみのやまとあまくはとむまく
やまと雪れ下よまくまくは月にだ
ぬ記すまくはとむまくは月にだ

聖もあしらひにのやまとあまくは
みそをすすめほとむまくはとむまくは
三月絶よと 甫云已亥春の候
門のねりやまくは朝霞
日暮れよとすすめほとむまくはと
那けはすとすすめほとむまくはと
も仕事せぬまくはとむまくはと
一月のすとむまくはと

おほきまことじよきにまつまの處よこは
申云紙色板まのとのを放ひて
絵よけ風たよどくぬ風うよ
是より爲とて右の幅持ててて
絵よまほたよも風とひとくぬ物とあ
せれ風かとわは風とけりや風持
てち悪と云へ下の深氏達つる
道を者の人也是は主席又清者と

は放ひておまかせと

絵よけ風たよどくぬ風うよ
やかてこそおみゆは成るんと也
申云巴有列りくすのれを説ひて
唐ちやうのねをゆきまかせ
是に何と云ひておまかせと
う巴云今度七つて、牡丹花
をとお一すじせんに極とぞと

され、唐もとひにやれど、梅花
を司よか」と牡丹の花と角す
ト書きとも、甫云

唐もとひの名を御、とくべつひし
牡丹の花は唐と云ひて、而況其
ハひても、名も同、云ひて、御、と
牡丹の花は、おほんじば、教、と號引
前は鳥、空と云ふ、今まことに、

巴よ五、圓、とさひと、を守て、劍、
庄よ外、かと、服と、さすり、笑、けり
とそ、う、せ、れ、人と、下れ、連、す、仰、
え、あ、う、ア、半、身、す、や、甫、云、巴、の、萬、
狂、り、い、ち、る、ゆ、と、て、う、う、う、
そ、う、れ、の、萬、白、と、み、ま、の、梅、
今、お、せ、う、と、云、よ、萬、と、萬、と、う、う、
全、折、萬、と、白、と、み、ま、の、梅、

身を折れぬの、こそ白猿がうた
れる白化はそつてのまづらほのそ
の毒なる化物をやうてうきあ
せりすけん角を身体を歌とぞ
内上へのまわる孔もキと已は向ぬ
二人のまつ事みなむ遠くからう去
日ひ色に因れものとうけと
あきや満月の明乃常在え

星を回る爲体のまかうそとまう教い
る、ある連歌は東云いやうちであ
巴云一のてまよこうくじ東云二の
序云よよやうてまよ一匁十をも
れりをせしとくまよ遠くにまよ
おのまよ高田とけりよと源氏よ田
れまとも時のうちくりとねゆく付は
ゆくにあつてある日よ高といこよ

れすすみあらうて此のゆゑを三と
立かず一月の前後あるときは
晴れ日と青々といふとき一いつの不
通をよしと人の序と裏とこの事
不思議なり運びのまことわかなよこ
思ひもあらずやあなじに風はのむ故
度こころのむけりうや
けのは、うまれタるの月をく

上の湯をあはて湯をあはせても理
をくらへぬせんやうつまへてくらうと
雪の風うちよゆう道具をくくふ
まことうてと云へてはシテアラズ
つらひともとくらひがつとほく風
巴ふたのうてとひと月までとくね
ちくふとままで雨ふたりとくねと
とくね月までとくね道の様子

とすとすなに揚井連歌よ

風をすくへタタタれのうえ
今すすらあすまがいのまえと
けぬとすくはのうにいきり風
れ等かすりとまねは窓人のくじひだ
の行とよ夕れとく風のやまめどと
はせぢまえに人へゆら床うきは
あからりよきわのうすい歌をうたふも

まことて坐てしてありともしみと
まこと食ふまうせをもみが放すとひき
せうともしとととんうる邊よ行け
ア何ともまぶひのうとこじとこ
月本とくは下りと向てまくまくと
なあ云はせしゆせわくらとく三義の
とくゆ合ふみく甫云巴教うたう
たく舞まくうとくうとくゆの

はく文まひやされ漢か乃々えく
写あくテ失経すくみ云ふもはの
志氣をもあらむ半ら詔うり又一白行
ムモハセトホのひひすと計三歳
歎小兒張景の連次第三以て數也
か櫻はんよの衆とまくられ
あれくわうりしと毎三月
已ニ高よひ聲と行ときよあらまくと
足あらゆ出れ故に聲べららと
先そ高と待はんと又一白月のじ
くさうきのものもとるのじくと
ヨリ一月のじくくととりとれゆとと
あめ東云極きふは五の連歌を
ひますとす而うるひてなばまれぬ
と待とえようとと付たれりてて
くれ作よじまれと待ようと

とゆきてのとまの極味十手より
あるよひにとまれる事と侍とあり
かほの侍侍と云ふとを承り奉れと
可よ主又あぬふと可よ主主キ
うかられすが爲を侍と、ごく又
かうれすが爲を侍と、云ふまう
もあることを村とまりはせんかく
はた被す村とあわがと云ふ
ト

ねくとまかとみよぬくねくのま
うちてまくとみのあととと侍と
れ治ぬとつゝてひくととつよす
みあきはとよつよつとつと
えめうるのとおとめの山の
月のしとくとと云うりやれの化と
凡とくへやとされいづのととくら
あるよひ古人のととく

ひれあるとよ席を啼らん
席のあきよよ山やるくさん
かまくよわせしもとひの山と峰と
至るにわふゑと村は一用みがく
左のやまと多めの化け伊豫ある
月アモモジル月のやまと一と
ち凡モモジル月のやまと一と
社モモキリソノ風のやけとと

作三月とやふとそんまち
左のやね事と新モ引遠くもと
龜山とまきーに至る背乃山と
いきぬとそと主領の風れやけキモ
るのふり巴云とやのう伊豫もと
みどりのすすみと山のう伊豫もと
もと山のう巴云とそと山のう伊豫
もと山のう巴云とそと山のう伊豫
もと山のう巴云とそと山のう伊豫

甫云アヌ祠ハ日本ニ有ルニ巴ヌモトと
ニテ禰須のミサセラテアホシムトモキモ
アホシム云アホシの連セラテコトアリ
エヌ書の教也ニシテ長ニアホシナセモアリ
エヌトのヘア教也ニシテ連セラテコトアリ
スモノのミサセラ耶ヨリ行ヒキモアリト
ヨリ皆ニキモアリテアホシ五ノモニ奇を
ヌチ教のセラムトモアリト巴ヌ物也

ナホシ
月と日清くアシレタのれひモの
晴日モハヌヲ郊ホモアシテキモトト
名の奇ナム月のシアホシ
シヌテ前也
ウヌヒモアホシモアホキアホ
水と氷とあらまとあらへてよ風モ白
たとちモアホシモアホシモ前ヨトイ
リアホシモアホシモ前モの邪也

とやれどもそ一ふゝ風か
習焉事もてあるがんてふくとく
えりがゆきてこむれあて付せられま
あひ五十九にはじめの頃と侍
ひしゆはるかにあれをなとまくおなとじ
三五とくう魚くはゆから古た都つを
きへきすよ

とくうしぐのあわう無さま

川よもやこのあらとまきえ
けりと紙合豆まにせせり者を全
人へてよの金也に絶有りんと
棕の切葉るべとくらむとえてと
こうじてよしと云せん色とつとせし
とまくは是とて竹ひと切葉るべ
き奇しきにゆ一いはひのひのと
云ひのあらうとまくはゆまくと

くは一見の如きの事と
少く無事と云ふてお終てござ
りきと云通理に即人の事と云ふ事と
うる風かくあらわすが事と云ふ事と
えてこそはく前ひどい事と云ふ事と
ありやまと云て云はれつきと云ふ事と
あらわしての如く身の付やう所の左近
に打ちあたと被とアラモトにて批判と
いふ事

此の作者の如きは遠西
と古くに行はせらるまつてよりの
まれを承を得てゆきてる事と
されとうとうとからてとかばひ云
ふと多くアラモトと云ふ事と云ふ事
ふと多くアラモトと云ふ事と云ふ事
れ書

株と云ふ事の事と云ふ事

三番

とくすゆは巴云秋よそじきくそ
あらんとや甫云は一すちやく秋よそ
じきくと云てへ事れ初かよたる
匂や秋と云ひゆすのと竹あはは
ゑのとよて秋のまたもしりくわ公
丁木彦のとお乃ういとくもと底七
軒のまと一すか全と云て
生引くゆるを月のあひよきと

か二三のあらうとすらうに能うて甫
巴云しのやまく甫云是へ古人の羽
許せ堯の粉と云て浴の下る
河を洗」と堯又と云者牛とうえ
多々よがよけり、许せ河と洗」と
足くゆるを事とすやしこふ家ユ賤
牛とひくゆるの脚をとつてり
そ家又とくせんとくゆる

とやけり事の身とあるれ縁つと
きしれどもうを古すの仕様
至事せ仕事に縫はセ古のう
水乃ノミのうひよ
伊勢れ海の約人坐きし今
は事せ仕事と月一妻也是
和寺

まことまことふとく

奇じ淫よ源うりきり
と云寺うりゆれあらこ付ねを
ち云宿胃れ済しと云ふやう約とせ
まてをよととやく御持よりく
飯人とぬくやらせとて隙と
せよ伊勢れ海の約人へ成せときも
ひりかみゆうてそあんたらす
思ひ知り敷と互の古すの白

狂歌風評抄
連句の者も
名前と申すてあるのにてよと
こまくふアシ和らばよ作者のんさ
「ふは處」の歌のうちとみよき
音へてうきの字すてよきまほ
ヨハ居よ仕事のふとくよめうてあ
葉と云ふ物ニシテ三葉をちらり
水波うち縁よりけりよのとくわ

うきりつまくらかへキトのまくわあ
葉の首より七枝に摘む其六
の葉のひきと君ゆかくまくと摘む
多よ名をかねまくとて今何
用あやくす。

アラホリモニヤアスヨハの所
アシモアシモアシモアシモアシモ
アセ七枝にと二箇むくみをもとぬま

をつまむて行の間よりや紅色レバをき
取汝の水乃せ事も角カミじ
行舟ナフツぬれや露ハラはほきくらん四
是ハあらのうとて古今の萬物マツモノを追
にあらぬ物マツモノをされそりとすり云
乎ハ一夕よぎれほのそじなシナ連シテ
かわのサハよにあくと付タタキと物モノ
そ處ハのたまにゆふや露ハラの物モノを食

物モノを従シテみぞ聖セイする極ヨリ余ヨリと王ミコトの御ミコト
物モノハかもまわれ物モノに日ヒ紅色レバに連シテ
か二ニ行ハシ足アシとられ破ハラハラとれ
めりてはる雲升クモヒカリの度ノリの只シテ四
みどりの神ミツキノミコトと人ヒトのうらうえ
ととこ光紙ヒカリシ也ハ上アベにとみどりの神ミツキノミコト
かやかがれ春ハラハラのうみどりをまつ

とひらこきうれ十波すあれれ
かねき寄筆六月よきだらえに
多二人

ふみあくふらをからく
と清也み絶色き寄よ
トモレのヰとれ玉水
呼うて浪うたのとみて巴
是の花と水のもよまなと

やくまれ花うはの花よ二三
まうれじまの花よまよ候わう
浪うたのと云か巴きす
おのまれと吉みうるす利
あつまくふれの裏やあさん
りゆうれいへ裏のまくともまくを
さんと云う音をわうもとと云うと
は字よ流よ手と云うと云う

すらやのうはよもかとあた
夕くせきすよ

山里さくようらすじつ
同人へむく雪のじゆきて
けり金は度くまむ雪に
とく村のわうりもとまむ雪の日
えのうみよみよみにこくうる事
せうく山のやうの村の日

かくもありてあくやとあく雪の
じ消ともと人の雪なと云ひます
ほうちとむち日

旅のりんとゆひをかう
まにすいとみづからすよ
る立れりとひにとひなむかたの書
てと五三とととととととととととと
とととととととととととととととととと

事事あやしく見えども
ほんじてあつづれにつづけ
まよすゝもれらばりと書く
けりと紙の判よ書ひてまづ
はあちがひやといへ年と書くを
ねと去へはせばせりと書
の取てきてこのこととておふる事のを
きすわく又はける

君アラタヒの取てまく
はタふ紙の判よ清高くんの取て
くまぬとゆめと見よ月夕うう
巴えまへと紙の理かく東云あ紙
の法と丸一とぞと詠きのき紙とぞ
をまく紙はうとあゆ仰よねはよ
へと豆法とくにほふせ道よまくも
往法終り可道よまくてあり多よ

とお紙のとよてとつまみのものかほ
ううそ

松のあらえ又おの床のうゑ
タゞて橘子をいりてまゝ巴
是又橘子にれりうり宿とる
と云はれのとゆを承らばむわざり
今尼色橘は宿とうとうまよをま
せぬうちもあらはみよけ竹と

とく宵と夜よ座とうりてまゝとアモ
きつこく今尼とくにゆきがむかひの
車うり古奇

行言きくまの正陰と宿とせは
花やニシムのわくじうま
是と名すとけすと花よぞうと
そんじあるおうきと書とまし
う凡へとくよすりうらうゆくとや

とねらひをせまううきはめよ
けう山居のへ二方よとて二面三方とせ
てねりとく行の清かに篤半面を
ちと二面の有るまちが成半面と
あるとぞ言テセムキはよと
うちめよとすりせんじやんじを
ゆんと云ふ山居と呼べれひそく後
古事のゆえんとせむと 逸賀賛列

山居と云ふ

おきれとよゆすり山くらう
山居と云連歌は是に云ひて之を
きねのアヌイはるかに歌ふと云
はるかすこやうと山にて照大神又
れ御主あるがといひかみ可姫在
もしりとく家見えに天公と食也如
仲公もあくねのアヌイはるかに

事と云ふに只取手とよばれり
ゆづらひてまへる事なし
はあらとあく連続とくこと
きよ鳥はと云ふとてくわや
れくのうをかく二月承ふを
しめの批判の爲め爲め
まづ月若れ下もじさしト
はくに鳥を毎ひたゞよまざせ

やうとよまづう又春の月をねえ
はな物とちとちの下れ月をいはば
きまよまよまをうむとく春れ
月の月を春の理とくとく此
をみつけると云ふが爲めにはの
れうひうよひううとまづ月
也翁

又ちうやく序のを

是法列も云にと云人のちひき
けり又云天教也主にてあらま
とすより人てまんと通うりやと
造とぬるがなまき能て行ひてく
はりとほきをひりあく西行はり
月日へまよふ事とゆく次行はり
せのくまくまくとゆくまくまくま
とくあるく月日の感え行は

是と謂ひの義と云也
あ卯三二行連亦義と云也
考るれど云ひてゆく林の月也
けりうちひりうりうり能て天通傳道
とて生ニテアリ天通、伏代の法は
傳道と云ひの事也。御典、けりん
はニニ六、御考れ山の天も確よニと
考え考るれ山の天も確よニと云也ニ

傳ふては通修りの天をよみと
乃んやまうて因典が典て云ひ
ちもすく又是に三竹息の方へ送
しれ翁の心懐てけ思教よ言を
正らすとあらゆる事あるとて色ぬわそ
缺く者有りとおりとアホをもう物と見
てかうとくと御ますか歴々沈々
ゆく歎行のとおりとおりてアホの事は

きれいとあるこそこそ連歌へあれ
一宇ちよこと云ふれ一もたらとす通
えあう事と所くねかきく万能よ吾
ゑの二つとも公法かと若狭経丈
仙果すもとを修とめと地獄よ
墮ちて又よろすとせとすり人を
すとるの内とぬじるの國とねり
ゆきとすと西法と修内すとくに

道中事多けと邪氣となりのもの
多と見えと斜とねと古てにしむ
ちまく通をすとよひと若きのまよう
つまこと内典すと老友の寂れとす
但子も了と云ふが興へてすね去り
生くか尋ねると老友と云ひ去ば
彼とあそぶと云ひと仰りまわり

うえ邪氣よ入る事とあはれり
をと風てぬとくへとみゆきとれま
とくさかへ通よきとくへとみゆき
又うよ絶色とあらまめの連歌とて
しまむらのうとくへとくへとくへ
連歌乃邪氣よ入る事とくへとくへ
りうんれをよ邪氣くへとくへとくへ
苦氣とアキラのうとくへとくへとくへ

アリハトモトヨウモラツト厚
アリハニテヨリモトナシトアシテ
人ノ云知テ皆五トロヒトニ事
去テ後詔經ニテ人吉と
又花輪山ニ唐子山を在はし初より
人を渴き秋田山と云つて通
ア波人今みどりマ熱えと不
可物^レ無モ今此世の連寺の後

くめりすと致うじと致よ治已
かくねよ言葉マリのととほ行の
且くに聲せ氣がり児のつゝ也言矣

猿巴

三重



